

# 哲学歴史学専攻

OSAKA CITY UNIVERSITY  
Graduate School of Literature and Human Sciences

哲学専修

日本史学専修

東洋史学専修

西洋史学専修

## 専修紹介

本専修は、教員数は比較的少ないが、狭義の哲学、倫理学、宗教学、美学といった、さまざまな哲学的諸領域をまんべんなくカバーする教員をバランスよく配置しており、ほぼどのような主題についての研究を目指す人でも、適切な指導を受けることができる体制を整えている。

狭義の哲学については、形而上学、論理学、認識論といった、古来西洋哲学の歴史において哲学の基礎学とされてきた諸領域の研究が本専修でもおこなわれているが、それとともに、科学哲学、心の哲学、言語哲学など、哲学のなかの新しい分野についても積極的に研究がおこなわれている。

本専修において研究されている倫理学では、倫理・道徳の本質や原理について考える一般的倫理学とともに、特に生命の技術的操作の是非などといった、現代特有の倫理的問題について研究する応用倫理学もまた含まれる。

本専修で扱われる宗教学は、一般にはむしろ宗教哲学と呼ばれている分野であり、宗教の本質や、成立根拠について、哲学的・原理的な視点から解明することを課題とする。しかしその過程で、キリスト教や仏教などの代表的宗教に関する立ち入った研究ももちろん必要になる。

感性の学としての美学は、一方では人間の感情、情緒、センス等の機能やメカニズムに関する諸問題の、他方では勝義の感性的経験の相関者としての美的なものに関わる諸現象、すなわち芸術や美に関する諸問題の解明を目指すものである。

### 教育方針

一口に「哲学」と言っても、それが扱う領域は広大であり、問題の性質によって、必要とされる言語能力（英語、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語、等）や、前提とされる専門的知識も、まったく異なってくる。したがって、専修構成員の全員が集まっておこなわれる指導の機会だけに頼っていても、個々の大学院生の研究主題には即応しきれない。そこで、実質的な指導の大部分は、大学院生個人と指導教員とのあいだの個別指導によっておこなわれている。個別指導では、必要に応じて指導教員のもとで研究的な読書会をおこなう機会を設けるほか、できるだけ頻繁に論文草稿の提出を求め、それを実際の論文にまで完成させるための具体的なアドバイスを与えている。

また、哲学専修では、他大学の研究者を招き、大学院生も参加しておこなわれる年に一度の「哲学研究会」を開催しており、大学院生が日ごろの指導とはまったく異なる視点からの啓発を受ける重要な機会を与えている。さらに、大学院生が自主的に開催する勉強会も、盛んにおこなわれている。

所属教員 .....

**美濃 正**

(哲学、論理学、心の哲学)

**仲原 孝**

(宗教学、宗教哲学、近現代ドイツ思想史)

**高梨 友宏**

(美学、芸術学、西洋近世哲学史)

**土屋 貴志**

(倫理学、応用倫理学、人権問題研究)

み の  
美濃ただし  
正 教授

専門分野 哲学

最終学歴 京都大学大学院文学研究科

学位 文学修士

## 研究内容

現代の英米哲学、特にいわゆる分析哲学を専攻しています。分野別で言えば、心の哲学と呼ばれている分野での仕事をいちばん多くしてきました。しかし、それ以外にも、倫理学、科学哲学、言語哲学、そして一般形而上学といった分野の問題にも関心があり、関連する論文も書いています。

## メッセージ・教育方針

大学院の授業をとおして教えられることはごく限られていると言ってもよいので、やはり院生諸君のそれぞれが自分で選んだ研究テーマについて、自ら研鑽を積み、考究を深めてゆくことが重要になると思います。しかし同時に、自分の研究テーマという殻に閉じこもることなく、それ以外の問題も含めて哲学全般についての理解を深めてゆくこともまた非常に重要なことだと考えています。

## 主要業績

- [著書] ■『心の科学と哲学: コネクションニズムの可能性』(昭和堂、2003年、共編著)  
 ■『知識と実在: 心と世界についての分析哲学』(世界思想社、2008年、共編著)  
 [論文] ■『心的因果と物理主義』(『シリーズ心の哲学 I 人間篇』、勁草書房、2004年)  
 ■『決定論と自由—世界にゆとりはあるのか?』(『岩波講座哲学 02 形而上学の現在』、岩波書店、2008年)

なか はら  
仲原たかし  
孝 教授

専門分野 宗教学・宗教哲学

最終学歴 京都大学大学院文学研究科

学位 博士(文学)

## 研究内容

宗教とは何か、人間はなぜ宗教を必要とするのか、という問題について、哲学的に考察することをめざしています。その際の基本的な着眼点は、宗教と哲学とがもっとも深いところで共通の根をもっていることに注目することです。これまでの業績は、カント、シェリング、ニーチェ、ハイデガーといった、近現代ドイツ哲学に関するものが大半を占めていますが、それは、これら哲学者の思想をあくまでそれ自体として解明しながらも、しかも同時にそこに、宗教と共通する源泉をみいだすことができるにちがいない、という関心に導かれています。

## メッセージ・教育方針

大学院生は個人で研究内容が千差万別ですから、授業はあくまで基礎学力(語学力、読解力など)の向上のみに徹し、大学院生の研究内容に即した指導は、徹底的な個人指導を方針としています。

## 主要業績

- [著書] ■『ハイデガーの根本洞察』(昭和堂、2008)  
 [論文] ■“Versuch einer Rekonstruktion von ‘Zeit und Sein’”, in: *Heidegger-Jahrbuch 7*. (Verlag Karl Alber 2013)  
 ■『ツァラトゥストラとニーチェとの対話』(『人文研究』第60巻(2009))  
 ■『ハイデガーのシェリング解釈』(『シェリング読本』(法政大学出版局、1994))  
 [翻訳] ■マルティン・ハイデッガー『カントの純粹理性批判の現象学的解釈』(ハイデッガー全集第25巻、創文社、1997、共訳)

たか なし とも ひろ  
高梨友宏 教授

専門分野 美学・西洋哲学史

最終学歴 大阪大学大学院文学研究科

学位 博士（文学）

研究内容

研究上の関心は次の三方向に向かっています。すなわち、①芸術作品の美的体験や美的価値の意味、作品存在の本質等に関する現象学的アプローチ、②近代日本における美学思想の受容史に関する総合的考察、特に西田哲学における美や芸術の意味についての批判的考察、③西洋近代哲学における「感情（情念）」と美的なものとの関係に関する哲学・美学史研究、以上です。そして、これら三つの方向を「哲学的人間学としての美学」という構想のうちに体系的に関連付けて包摂することを、自分のライフワークと考えています。

主要業績

[著書] ■『美的経験の現象学を超えて—現象学的美学の諸相と展開—』（晃洋書房、2001）

■『思索の道標をもとめて—芸術学・宗教学・哲学の現場から—』（萌書房、2007、共編著）

[論文] ■『Die Philosophie Nishidas als eine "Kunstlehre"—Überlegungen zu Nishidas Beziehung zur Kunsttheorie Fiedlers—（*Aesthetics* No.7, 1996）

■『西洋近代美学の一概観』（松山壽一監修、加國尚志、平尾昌宏編『哲学の眺望』、晃洋書房、2009）

メッセージ・教育方針

テキスト読解を主とする演習では、思想家の意図を汲むと同時に、今を生きるわれわれの生活実感と関連づけて理解するように努め、また自由な討論の場を創出するよう配慮しています。授業や個別指導を通じて学生が主体的な思考力を自ら養うことを期待しています。

つち や たか し  
土屋貴志 准教授

専門分野 倫理学

最終学歴 慶応義塾大学大学院文学研究科

学位 文学修士

研究内容

(1) 倫理学はいかにして可能であるか、倫理学はいかなる方法をとらうのか、等に関する原理的哲学的考察（倫理学基礎論）。(2) 倫理学の事例研究としての医療倫理学（医療をめぐる倫理的問題の研究）。なかでも、このところ「人を対象とした実験・研究の倫理はどうあるべきか」について、歴史的・社会学的視点も踏まえながら研究しています。(3) 倫理学の実践としての人権問題研究。

以上の3つの分野を相互に関連させながら、総合的に「倫理学とはいったい何なのか」を考えています。

主要業績

[著書] ■『「ささえあい」の人間学』（法蔵館、1994、共著）

■『先端医療の社会学』（世界思想社、2010、共編著）

[論文] ■『The Imperial Japanese Experiments in China』*The Oxford Textbook of Clinical Research Ethics* (2008, Oxford University Press)

■『歴史的背景』『医学研究』（シリーズ生命倫理学 15 巻、丸善出版、2012）

■『医薬品の承認制はパターンリズムか？』『医学哲学医学倫理』（第 27 号、2009）

メッセージ・教育方針

現実の問題を取り扱う「応用倫理学」（医療倫理学も含む）など学際的分野の研究を行う場合、伝統的学問の十分な訓練を受けておかなければ、研究上のアイデンティティを確立することができません。そこで「応用倫理学」の研究を志す方でも、まずは西洋倫理学の基礎的素養や研究方法をしっかりと身につける段階から始めます。

# 専修の特色

## 教室行事

修士課程では、年度初めのガイダンス、および後期に2度おこなわれる修論中間発表会が、専修全体としておこなわれる修論指導の機会となっている。

博士課程に関しては、後期に随時、論文指導の機会が設けられている。

さらに、年に一度の哲学研究会でも、大学院生に積極的に研究発表の機会を与え、本学教員以外の参加者から受けた論評を、論文完成のために生かすよう推奨している。

## その他の特色

本専修の大学院生に見られる顕著な特徴は、社会人として長らく活躍してきた人が、退職後に本専修を志して入学してくる例が、他専修に比して非常に多い、という事実である。哲学という学問の性格上、一定年齢以上にまで人生経験を積んだ人たちに、とりわけ哲学が訴える多くのものをもっているのだと思われる。本専修には、開拓精神旺盛な若い人たちと、そうした年配の人たちとが、親しく議論を交わしながら互いに研究を高めあうという、独特の雰囲気があり、それが本専修の大きな魅力のひとつとなっている。

哲学は、成果を出すまでに時間のかかる学問である。本専修の大学院生は、学会発表や論文公表をさほど急がず、じっくりと思考を醸成することを重視する傾向が強い。短時間の多産性を重視する現代の風潮に逆行するよう見えるそうした研究姿勢は、しかし本来の哲学にとって重要な性質である。ここにも本専修の大きな特色があると言することができる。

## 博士論文・修士論文題目

### 博士論文

- ▶ 直示的思考と知覚についての研究 —— エヴァンズ、マクダウエルの検討を通じて ——

### 修士論文

- ▶ 西谷啓治の宗教論 —— 「空」の立場とその時間論をめぐって ——
- ▶ ヒュームは因果実在論者か？ —— ニュー・ヒューム解釈を巡って ——
- ▶ ウイトゲンシュタイン『論理哲学論考』における像の理論と独我論の関わり
- ▶ カントの最高善の概念について
- ▶ 「神の死」をめぐるニーチェの洞察
- ▶ モルモン教における信仰の形態 —— 聖典からの教義理解と考察 ——
- ▶ 真の生をめぐるベルクソンの時間論 —— フッサールとの比較を通して ——
- ▶ メルロ＝ポンティにおける「共存」の他者 —— サルトルとの比較から ——

# 進路

## 前期博士課程修了

高校教員、公務員、塾講師、官公庁、一般企業、僧職、  
後期博士課程進学、他大学の大学院への進学など

## 後期博士課程修了 (単位取得退学者も含む)

大学非常勤講師、高校教員(復職を含む) など

# 在学生・修了生の声

在学生

渡邊 倬郎 さん 前期博士課程

私は41年間大阪府立高校の社会科教諭を勤め完全退職後、2013年4月から67歳にして憧れの大阪市立大学大学院文学研究科哲学専修の大学院生となった。予習・復習に忙殺されたが、この一年間はとても充実していた。「学問に遅すぎるといことはない」のだ。カントは、神でもなく、動物でもない、まさに人間の立場に立って人間の尊厳と限界を語る。そして「哲学するとは自ら思索すること」だと。そのようなカント哲学の原点を学びながら、教育のめざす人格の完成の問題、原発など核の問題、戦争と平和の問題など現代の問題を根底から考え、思索を深められる。私はここに研究の面白さを見いだしている。ともに「哲学」しましょう！

在学生

中西 貴裕 さん 後期博士課程

私は外部の大学から本学の修士課程に入学し、現在博士課程に在籍しています。ここでは外部入学者の視点から哲学専修を紹介させていただきます。

大学院の授業は外国語文献の講読が中心ですが、単に字面を追うのではなく、背後にある論理や思想を精確に読み解くことが要求されます。そしてそうした訓練を経て自分自身の問題を定め、論文を執筆します。各分野に精通した先生方はその導きの糸となって下さるでしょう。

また、院生同士の勉強会も盛んに行われており、専門分野以外の見識を深めたり、語学力を磨くこともできます。大学図書館としては有数の蔵書数を誇る学情センターもあり、本学の哲学専修は恵まれた研究環境にあると言えます。

修了生

大阪府立高校講師  
赤阪 諒 さん 前期博士課程

「それじゃあ、前回の続きから始めましょうか」珈琲の香りが漂う教室、窓からは午後の暖かな光が差し込む中、穏やかな先生の声と共に授業は始まります。でも穏やかなのは最初だけ、テーマに関する詳細な検討に入ると途端に白熱した議論が飛び交います。時には授業時間を越えて、研究室に戻ってからも議論が続くことも。大学院という場所の魅力は、単に「授業時間を過ごす」だけだった場所が、「思索を共に研磨する」場所へと変わることだと思います。院生それぞれの研究内容は違って、互いに影響しあいながら自分たちの進むべき道をじっくりと探求していく、それこそが、大学院という場所で研究を続けることの意味ではないかと、私は思います。

修了生

大阪府立高校教諭  
吉川 泰生 さん 後期博士課程

私は現在、大阪府立高校で教諭をしています。府の自主研修制度を使って2年間休職し、後期博士課程で研究することにしました。学部・修士課程以来、20数年ぶりに懐かしい母校に帰ったという感じでした。2年間でやっとな昔の感覚を取り戻せたかなという頃に職場に戻りましたが、その後長期履修制度を活用して後期博士課程を終えることができました。学生時代からの学問の進展を肌を感じたり、またISや市大哲学研究会などで発表の機会を頂いたり、その経験は教職に戻ってからも役にたっています。博士論文の提出まで道は長いですが、現在の大学・大学院教育のあり方などに、実際に触れることができたことも本当に得がたい経験でした。

# 日本史学専修

## 哲学歴史学専攻

## 専修紹介

日本史学専修の特色・強みを三つの視点から紹介します。

### ①教育・研究体制の幅広さ

本専修には、考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史の5名の教員が在籍しています。このように日本史全般に及ぶ幅広い体制を構築している大学は全国的に見ても少なく、大きな強みとなっています。

### ②「都市」をテーマとした教育・研究

本専修では、各教員が研究テーマの一つ（主軸）として「都市」を対象としていることも特徴的です。大阪市立大学は、大阪に基盤をおく都市型総合大学として、「都市」という場が要請する学問的課題に向き合うことを大きな使命としています。本専修は、歴史学的な側面からこの問題にアプローチし、大学の果たすべき社会的な役割の一翼を担っています。

### ③地域に根ざした教育・研究

本専修では、地域に根ざした教育・研究も重視しています。毎年夏には、大阪府和泉市教育委員会と合同で「地域の歴史的総合調査」（合同調査）を実施し、教員・院生・学部生をはじめ、OB・OGの参加も得て、時代の垣根を越えた現地調査を実施しています。調査の内容は、旧家や寺社等に残された古文書の整理・撮影や、地元の方々への聞き取り、現地踏査などと多岐にわたっています。

上記のような特色を持つ本専修は、全国的にもユニークな専修として定評を得ています。なお、後掲の博士論文・修士論文一覧のように、院生は幅広い研究テーマに取り組んでいます。その意味では、専修全体での共同の営為と、院生一人ひとりの自主的な研究の統一という点こそが、本専修の最も重要な特色といえるでしょう。

## 教育方針

古代から現代までの日本社会の歴史を学ぶとともに、自ら史資料を分析し研究する力量を身につけることをめざします。その際、考古学的遺跡・遺物、古文書、日記や記録、近現代の公文書、習俗・伝承など、さまざまな史資料の分析法を学び、それらを駆使して、政治史・社会史・都市史・文化史などの幅広い視野をもった歴史研究ができるようになることを目標としています。

以上の方針から、前期博士（修士）課程では、自分の専門とする時代・分野のゼミだけでなく、幅広い時代・分野のゼミにも参加することを求めています。この点は他大学との大きな相違ですが、幅広い時代・分野への対応力は、将来、大学・博物館・教育委員会などに就職する際に、必ず求められるものです。後期博士課程では、その上に立って、自分の専門により密着した形で徹底的な専門研究の能力を身につけるための教育を行います。

しかし、本専修を教員から院生に対する一方的な「教育」の場とするつもりはありません。毎年行う和泉市の合同調査では、地域の現場で地域史を調査し、ともに学ぶ機会を設けています。ほかにも教員・院生・学部生が一体となった時代ごとの調査や研究会、勉強会などが数多く開催されており、そこでは通常の授業だけでは得られない、多くのことを学ぶことができます。自らの主体的な学修と、共同の営為としての歴史学とが結合した《学知》共同体をめざしています。

所属教員 .....

**岸本 直文**

(考古学、前方後円墳の研究)

**磐下 徹**

(古代史、郡司制度の研究)

**仁木 宏**

(中世史、都市史・地域社会史の研究)

**塚田 孝**

(近世史、身分制・都市社会史の研究)

**佐賀 朝**

(近現代史、都市史・遊廊社会史・戦時社会の研究)

きし もと なお ふみ  
岸本直文 准教授

専門分野 日本考古学

最終学歴 京都大学大学院文学研究科

学位 博士(文学)

### 研究内容

古墳時代の研究、とくに前方後円墳など古墳にもとづく社会関係を追究している。3世紀～6世紀の古墳時代400年間は、農耕社会の定着の上に、倭王権が生まれ国家形成に進む時代である。列島規模の関係が生まれていることは、前方後円墳の共有を典型とする古墳の築造に示されるが、それは倭国王墓を頂点とする身分的秩序を表し、この時代の国家体制の基軸であった。弥生時代の終末からいかに倭王権が生まれるのか、できあがった倭国は、東アジア情勢の影響を受け、また不安定な王権は政治変動を繰り返すが、次第に中央権力が卓越していく、そうした過程を古墳から具体的に解明することをめざしている。また近年は、中央権力の卓越の上に前方後円墳の築造が廃止され、墳墓の築造を規制していく6世紀末から7世紀の、古墳の終焉に取り組んでいる。

### 主要業績

- [著書] ■『史跡で読む日本の歴史 2 古墳の時代』(吉川弘文館、2010年、編著)  
 ■『和泉郡の条里』(和泉市史紀要)第19集(和泉市教育委員会、2012年、編著)  
 [論文] ■「前方後円墳の2系列と王権構造」『ヒストリア』(第208号、2008年)  
 ■「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告』(第185集、2014年)

### メッセージ・教育方針

歴史学の一分野である考古学の長所は、取り扱う資料が遺跡であり、時代・地域・階層的偏差が少なく、人の暮らしあるところ必ず材料が存在する点にあり、文字資料がある場合の具体性と異なる意味で、社会の実態を比較的公正にとらえうる。また各時代に残された集落や墳墓や官衙や寺院などから、比較的長いスパンでの社会の変化をたどることも得意である。研究は自由だし、自発的なチャレンジ精神が重要。学術研究を進める大学は、同志が集まるところで、教員・大学院生・学部生の別なく自由に議論し、ともに学ぶところだと思う。

いわ した とおる  
磐下徹 准教授

専門分野 日本古代史

最終学歴 東京大学大学院人文社会系研究科

学位 博士(文学)

### 研究内容

奈良・平安時代を中心とした、日本の古代史を専門としている。

主な研究テーマは、古代の地方行政の末端を担った郡司の研究で、郡司を切り口に、古代国家の地方支配や地域社会の在り方を考察している。近年では、大阪周辺地域の古代史研究にも取り組んでいる。

また、平安時代の貴族の日記の読解・註釈も行っており、当該期の政治・行政システムを分析している。

両テーマともに、一つ一つの史料を丁寧に考察すると同時に、日本の古代国家像を複眼的に明らかにしていくことを目標に研究を進めている。

### 主要業績

- [著書] ■『御堂関白記全註釈』(思文閣出版、2007・2009・2010年、共著)  
 [論文] ■「郡司と天皇制」『史学雑誌』(116編-12号、2007年)  
 ■「郡司職分田試論」『日本歴史』(728号、2009年)  
 ■「郡司譜第考」『ヒストリア』(227号、2011年)  
 ■「年官ノート」『日本研究』(44集、2012年)

### メッセージ・教育方針

古代史の史料は限られている。したがって、様々な種類・分野の史料を取り扱えるようになることが大切であると私は考えている。自分の専攻する分野だけではなく、幅広い視野を持って研究に取り組むことで、豊かな古代史像を描くことができるはずである。その意味で、日本古代史はいまだ色褪せない魅力と可能性を備えた分野だといえるだろう。



# 仁木 宏 教授

専門分野 日本中世史

最終学歴 京都大学大学院文学研究科

学位 博士（文学）

## 研究内容

日本中世の都市史、地域社会史を研究している。中世都市は、京都、寺内町、「山の寺」、港町、城下町など、多様でバラエティに富むのが特徴である。これらの都市の変遷を実証的・理論的に解明してきた。また全国規模の流通の中での都市の形態についても研究を進めている。文献史学のみならず、考古学、歴史地理学、建築史学（都市史学）などとの共同作業にも取り組んでいる。また近畿地方を中心とする地域社会についても研究を深め、社会の全体構造を立体的に解明してきた。社会のあり方が、大名や統一政権をどのように規定しているのかという視角から権力にも注目し、中世社会の変容を構造的にとらえることも試みている。平安京・京都研究集会、1617会などの研究集会を主催し、科学研究費などを活用することで、日本中世史研究全体の活性化にも寄与したい。

## 主要業績

[著書] ■『空間・公・共同体 中世都市から近世都市へ』（青木書店、1997年）

■『戦国時代、村と町のかたち』（山川出版社、2004年）

■『京都の都市共同体と権力』（思文閣出版、2010年）

[共編著] ■『守護所と戦国城下町』（高志書院、2006年）

[論文] ■'The city of Osaka in the medieval period : Religion and the transportation of goods in the Uemachi Plateau', *City, Culture and Society* Vol.9, 2012.

## メッセージ・教育方針

日本史学は文献史料を正確に解読することが学問の基礎である。史料からどのように歴史像を描いてゆくのか、きっちりと学んでほしい。一方、中世史を研究するためには「現場」を知ること大切である。年2回の合宿、月1回の遠足などの機会に中世の都市や村落の遺構・遺跡をフィールドワークし、地域の中で歴史像を鍛えることにも心がけている。大阪市立大学の日本史研究室での共同研究を糧に、大学教員、博物館学芸員、文化財専門職員などとして日本全国で活躍する研究者を育てることが私の目標である。

# 塚田 孝 教授

専門分野 日本近世史

最終学歴 東京大学文学部

学位 博士（文学）

## 研究内容

私の研究は、3つの大きな柱から成り立っている。第1は、身分制に収斂しない部分＝「身分的周縁」を含めた近世身分社会史研究である。第2は、身分制の問題を江戸や大坂という都市の場において考える所から進展させてきた都市社会史の研究である。これらについては、最近は大坂の非人身分（＝垣外仲間）について集中的に取り組んでいる。その際、〈法と社会〉の視点から社会の実態に迫る分析方法を提唱している。

第3は、和泉市史に関わるなかで取り組んできた和泉地域をフィールドとした地域史研究である。その際、和泉市域に所在した槇尾山や松尾寺などの地方有力寺院を中核とする地域社会構造を解明する《寺院社会の地域史》を構想し、また和泉市域の時代を越えた開発の進展を軸に人々の《生活構築の歴史》を模索している。

## 主要業績

[著書] ■『大坂の非人—乞食・四天王寺・転びキリシタン—』（ちくま新書、2013年）

■『近世身分社会の捉え方—山川出版社高校日本史教科書を通して—』（部落問題研究所、2010年）

■『近世大坂の都市社会』（吉川弘文館、2006年）

■『歴史のなかの大坂』（岩波書店、2002年）

■『近世身分制と周縁社会』（東京大学出版会、1997年）

## メッセージ・教育方針

歴史に様々な想像をめぐらすのは楽しいとの声をよく耳にする。しかし歴史史料と真摯に向きあうと、やわな想像力より歴史の現実はずっと豊かだと痛感する。その豊かな歴史の裏にわけっていくことはとても楽しい。

私は、歴史に名を残すこともなかった民衆の過去に生きた意味を掘り上げるような歴史学を志してきた。歴史において過去の民衆の生きた意味を確認することは、現在を生きている（わたし）自身の生きる意味の自己確認である。自己喪失に陥りがちな困難な時代状況のなかで、こうした歴史学を共同の営為として進めていきたい。

さが  
佐賀

あした  
朝 教授

専門分野 日本近現代史

最終学歴 大阪市立大学大学院文学研究科 学位 博士（文学）

## 研究内容

現在の研究テーマは、四つである。①近代大阪の都市社会史研究。近代大阪の都市社会を構成した、多様で個性的な地域社会を具体的に明らかにしてきた。居留地や工場地域、スラムや遊廓地のほか、近年は市場社会にも関心を広げつつある。関連して、1920年代の都市社会政策・住宅政策や方面委員制度に関する業績もある。②「遊廓社会」史研究。近世～現代を視野に、日本列島各地の様々な遊廓の比較類型史的研究を進めている。③戦時下の社会についての研究。「十五年戦争」期の国民動員政策が地域社会や市民生活に及ぼした影響とそれに伴う社会変容について、軍事援護を主な素材に論じている。④近代和泉地域の研究。近代和泉地域に普及した綿織物業の実態と生産・流通構造や地域社会との関係について現地調査を進め、和泉市史などで叙述している。

## 主要業績

[著書] ■『近代大阪の都市社会構造』(日本経済評論社、2007年)

[共編著書] ■『シリーズ遊廓社会 1 三都と地方都市』(吉川弘文館、2013年)

■『シリーズ遊廓社会 2 近世から近代へ』(吉川弘文館、2014年)

[論文] ■「居留地付き遊廓の社会構造—東京築地・新嶋原遊廓を素材に—」(『部落問題研究』203号、2013年)

■“Urban Lower-Class Society in Modern Osaka”(英訳 John Porter), *City, Culture and Society* Vol.9, 2012.

## メッセージ・教育方針

歴史学は、過去と現代の対話である。私が専攻する地域史は、名もない民衆の各時代における生活実態や、歴史的事件との関わりを、地域史料によって復元し、その意味を考えるものである。近世～近現代の地域史は、新史料や新しい史実を、自分の手で明らかにする醍醐味も味わえる。近現代の社会は、地理学や社会学などの対象にもなるが、歴史学は、政治・経済・法・社会・文化などにわたる人間の営みをトータルに捉え、多様な史料を正確に解釈・分析して社会的事象を客観的に捉える科学的方法の最も基礎的な学問であり、そこに強みがある。

# 専修の特色

## 教室行事

4月：新年度ガイダンス、5月：大阪市立大学日本史学会大会、6月：歴史学合同ハイキング、9月：日本史学教室・和泉市教育委員会合同調査、各時代ごとの秋合宿（史跡見学や研究報告などが中心）、11月：歴史学合同実習旅行、1月：修士論文提出、2月：

修士論文口頭試問、歴史学合同研究発表会、3月：学位記授与式、卒業・修了記念パーティー（この他、夏休みや春休みに、史料調査、古墳の測量・発掘調査を行うこともあります）

## 出版物

大阪市立大学日本史学会の会誌として、『市大日本史』を刊行しています（1～17号、1998～2014年）。

また、本専修では教員全員が編さん委員などとして、大阪府和泉市の市史編さんにかかわっています（先に紹介した合同調査もその関係で実現したものです）。その成果として、『横山と槇尾山の歴史』（和泉市の歴史1地域叙述編、2005年、和泉市史編さん

委員会）以下4冊の市史が刊行されています。

その他、専修教員が中心となって企画したシンポジウムなどをもとにした論集等も多数刊行しています。次にその一部をあげておきます。 ■栄原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、2006年 ■塚田孝・佐賀朝・八木滋編『近世身分社会の比較史一法と社会の視点から一』清文堂出版、2014年

## その他の特色

本専修では、1998年に教員、学部・大学院の在学生、OB・OGを中心として大阪市立大学日本史学会を設立し、事務局を置いています。当学会は、年1回の大会の開催と会誌『市大日本史』の刊行を通じて、日本史の学術的研究の進展普及と、会員間の研究交流を進めています。

また本専修は、近畿地方の日本史研究の拠点として、大阪歴史

学会や大阪歴史科学協議会などの事務局をつとめてきました。

なお、本専修では海外の大学（イェール大学・ノースカロライナ大学・シンガポール国立大学・上海大学・釜山大学など）の日本史研究者と恒常的な研究交流を行っています。院生が海外で研究発表する機会もあります。

# 博士論文・修士論文題目

## 博士論文

- ▶ 「群集墳と終末期古墳の研究」
- ▶ 「正倉院文書の情報化と史料構造」
- ▶ 「戦国期畿内社会と三好政権」
- ▶ 「近世和泉国におけるかわた村の研究 —— 泉郡南王子村を中心に ——」
- ▶ 「近世和泉国における村落社会と領主支配」
- ▶ 「畿内・近国の旗本知行と在地代官」
- ▶ 「明治期の西園寺公望に関する研究 —— 法典調査会および文部大臣時代を中心に ——」

## 修士論文

- ▶ 「古代畿内における集落形態の変容とその特質」
- ▶ 「古代日本の軍事政策について —— 奈良・平安時代初期の軍制改革を中心に ——」
- ▶ 「中世後期における南山城地域の社会構造」
- ▶ 「戦国期における朝倉氏越前国支配の再検討」
- ▶ 「近世大坂における茶屋の考察 —— 御池通五丁目・六丁目を中心に ——」
- ▶ 「近世後期大坂における砂糖の流通構造」
- ▶ 「明治～大正期大坂の都市社会構造と有志的地域組織 —— 南区内安堂寺町二丁目を事例として ——」

# 進路

## 前期博士課程修了

本専修の前期博士(修士)課程修了者には、本専修で修得した知識・技術を生かし、中学・高等学校の社会科教員(大阪府、千葉県、奈良女子大学附属など)や、公文書館(大阪市公文書館、鳥取県立公文書館、京都府総合資料館など)の職員などとして活躍している人が数多くいます。

その他、公務員(大阪府役所、大阪府警、京都市役所、城陽市役所など)や大学法人(大阪市立大学、北海道大学など)、およびさまざまな分野の企業(山陰中央新報社など)に就職して活躍している人もいます。

また、前期博士課程で取り組んだテーマをさらに追究すべく、後期博士課程に進学する人の割合も大きいです。その場合は、ほとんどが本専修の後期博士課程に進学しています。

## 後期博士課程修了 (単位取得退学者も含む)

本専修の後期博士課程修了者には、高度な専門知識を生かし、学術的な場で活躍している人が数多くいます。

大学(大阪市立大学、神戸大学、新潟大学、鳴門教育大学、関西学院大学、桃山学院大学、帝塚山大学、武蔵大学、武庫川女子大学など)で教壇に立ち、さらなる研究の深化と後進の育成に取り組んでいる人、あるいは博物館(大阪歴史博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、歴史館いずみさの、彦根城博物館、和歌山市立博物館、福井県立博物館など)の学芸員として、地域に密着した研究や、研究成果の社会への還元に従事している人もいます。

また、自治体史の編さん(和泉市史、三田市史など)や発掘調査(大阪文化財研究所、柏原市教育委員会、勝山市教育委員会など)にたずさわっている人もいます。その他、中学・高等学校社会科教員として活躍している人もいます。

## 在学生・修了生の声

在学生

道上 祥武さん

前期博士課程

大阪市大の日本史学専修は考古から近現代に至る全ての時代を学ぶ体制が整っており、私は考古学を専攻しています。学部頃から大阪市大で考古学を学び、将来的には文化財行政に現場で携わる仕事に就きたいと考えています。第一線で活躍されている先輩も大勢いらっしゃいます。

考古学と歴史学が独立している大学も多いですが、大阪市大では考古学も歴史学も同じ内容を学びます。考古学者にとって、全ての時代を考える能力が問われることは勿論ですが、文献史学者にとって考古学的見地が果たす影響は大きいと思います。時代や分野にとらわれずに広い視野で学べる、そういったところが大阪市大の日本史学専修の特色といえます。

在学生

吉元加奈美さん

後期博士課程

私は4回生から近世史(江戸時代)ゼミに所属し、大坂を主なフィールドとして学んでいます。ゼミの人たちの研究テーマは多様ですが、共通しているのは、精緻に史料を分析し、支配者側の論理をおさえつつ、農民や商人といった人々の営為を明らかにし、近世社会のあり様に迫ろうとする態度です。このように、普通の人たちに寄り添いながら社会の構造やそれが抱える問題を考察する姿勢は、いま私たちが生きている現代社会を考える上でも、十分に活かすことが出来ると考えています。

日本史学専修は先生方との距離が近く、授業以外の様々な場面で支えてくださいます。また経験豊かな先輩や日本史コースの学部生といった、幅広い構成員と共に学ぶ中で、良い刺激を受けられます。研究者を目指す学生として、またひとりの人間として、大きく成長できる、そんな場であると私は思います。

修了生

鳴門教育大学・准教授

町田 哲さん

後期博士課程

大学院を終えて10年以上たった今でも、論文や史料を読みながら、ゼミのあの先生ならばこう読んだのではないか、あの仲間はこう読むのではないか、と自らの中に異なる眼をもって検討しようとする自分に気づくことがあります。大学院生の時、「院生ともなれば一人の自立した研究者だ」と力みながらも、出会った先生や仲間と、本気になって議論し、ああそうか!と思えたり、自分の歯がゆさに涙をこらえて悔しがったりもしました。そんな院生時代を、「その後には何か役立っている」という安直な言葉で表現することはできません。「地域に懸命に生きた人々に寄り添い、その痕跡の中から歴史をひもといていく」という歴史を見る眼や生き方を、かけがえのない仲間と誠実に学び考えていく「共同」の過程でした。

修了生

和歌山市立博物館・学芸員

小橋 勇介さん

後期博士課程

研究を進める上では、自分の考えを話したり、人の話を聴いたりして、自らの考察を練り直すことが不可欠です。そのためには、忌憚なく意見を出し合える「仲間」の存在が重要です。私は岡山大学から進学してきたのですが、日本史学専修は風通しが良く、先生や先輩に対して自分の考えを話すことができる雰囲気がありました。また、自分の考えを他人に分かりやすく伝える能力も必要です。私は中世史の研究会での報告をとおして、そのことを実践的に学ぶことができました。博物館学芸員の仕事のひとつに展示解説がありますが、来館者に分かりやすく説明しなければなりません。その際、大学院で身に付けた能力が役立っています。

# 東洋史学専攻

## 専修紹介

大阪市立大学東洋史学専修は、中世から近代までの中国史、近現代の南アジア史、近世・近代の中東・西アジア史を中心に、アジア諸地域の歴史を幅広く研究対象としている。本専修では、教員や大学院生個人がそれぞれの対象地域の研究に、社会や政治、経済や文化など、様々な観点から取り組むとともに、マクロな視点から人類社会の歴史構造に迫ろうとしている。

本専修の研究者は、それぞれの関心に応じて、種々多様な形式で、様々な言語で表された原典史料を用い、複眼的に歴史事象にアプローチしている。具体的には、中国の古代出土史料、正史や実録、文集、族譜、裁判資料、民国期の現地調査資料、王統系譜、政府刊行物、会計帳簿、インドの民間企業公文書館やインド国立公文書館や各州政府公文書館が保有する一次史料、オスマン・トルコ語やアルメニア語の中央政府行政文書や請願書、歴史的刊行物、ヨーロッパ諸国の外交文書といった文字史料、さらには絵画や口述史料、現地調査で得られた情報が挙げられる。そしてこうした諸史料から得られた情報を、政治学や経済学、宗教学、社会学といった隣接諸学問の成果を踏まえて分析することで、アジア諸地域の歴史と、それを取り巻く世界史像を描くことを目指している。

### 教育方針

本専修における研究の指導は、中国史やインド史といった個別領域での研究の深化と、他地域を扱う研究者からの助言や批判を通じてなされる相対化という二つの段階を交互に積み重ねることから成り立っている。前者に関しては、教員個人への演習を通じた史料の読解や分析、論文の個別指導に加え、本専修の教員が中心となって開催される、中国近世近代史研究会や宋代史談話会といった研究会、オスマン史料講読会などの勉強会を通じてなされる。また、本専修に所属する大学院生は、それぞれの専門分野に応じて学会や研究会に積極的に参加し、学外の研究者と積極的に交流を持つことが期待される。後者に関しては、東洋史学専修の教員と大学院生全員が参加する演習および、西洋史、日本史学専修と合同で例年二月に開催される研究報告会を通じてなされる。こうした場において、研究関心の近い教員、院生だけでなく、他地域を扱う研究者からも助言や批判を得ることで、本専修の大学院生は、より大きな文脈に研究成果を位置づけることを目指すとともに、幅広い視野からアジア諸地域の歴史像を描くことに取り組むことになる。

所属教員 .....

井上 徹  
(中国近世近代史)

平田 茂樹  
(中国近世史)

野村 親義  
(近現代インド経済史)

上野 雅由樹  
(中東・西アジア近代史)

いの うえ とおる  
**井上 徹** 教授

専門分野 **中国近世近代史**

最終学歴 名古屋大学大学院文学研究科 学位 博士(歴史学)

研究内容

専門は中国近世近代史。おおむね明清時代から民国期までの時代を中心として、家族・宗族、地域や都市の社会構造、アジア都市の比較、商品流通と国家の徴税政策との関係、民族問題（とくにヤオ族）、アジア海域の交流などのテーマを扱ってきました。最近とりわけ関心を抱いているのは、明代に辺境であった珠江デルタが科挙官僚制を軸とする儒教化のシステムのなかに組み込まれ、漢族の先進地域へと上昇していくプロセスを明らかにすることです。

メッセージ・教育方針

私のゼミでは、授業や研究会を利用して、明清時代、民国期の文献資料や関連の研究論文等を講読して史料読解力、論文作成能力を高めるとともに、現地調査を通じて中国社会の現在の状況への理解を深め、これを歴史分析に活かすことを目標としています。

主要業績

- [著書] ■『中国の宗族と国家の礼制—宗法主義の視点からの分析—』(研文出版、2000年)  
 ■『海域交流と政治権力の対応』(2011年、汲古書院、編著)  
 ■『<大阪市立大学文学研究科叢書7>都市の歴史的形成と文化創造力』(2011年、清文堂、共編著)  
 [論文] ■『「華」はどのように「夷」を包摂したか?』『歴史評論』(733号、2011年)  
 ■『明末の商税徴収と広東社会』『年報都市史研究』(19号、2012年)

ひら た しげ き  
**平田茂樹** 教授

専門分野 **中国近世史**

最終学歴 東北大学大学院文学研究科 学位 博士(文学)

研究内容

研究内容は中国の宋代を中心に、政治史、社会史、文化史など幅広く研究を行っています。政治史については従来の実証的な政治史の方法論にとどまらず、システム、空間、時間、過程、ネットワーク、コミュニケーションなどをキーワードとして、「誰が、いつ、どこで、どのように政治に関わっていくのか」という観点から政治の奥深い姿の解明に努めています。また、近年は「科挙社会」をキーワードとしながら、宋代の社会がどのように展開していたのか、社会史、文化史的なアプローチを進めています。

メッセージ・教育方針

歴史学の研究のためには、幅広い知識、教養が必要となります。受講生の皆さんは、日頃より、歴史学の書籍にとどまらず、様々な分野の書籍を読むように努めてください。また、中国に関わる小説、映画、ドラマを見たり、芸術、文化、風俗に関わる文物に触れることも大切です。授業では、現代中国社会の諸問題に触れながら、受講生が長いスパンで歴史の流れをとらえられるよう努めています。

主要業績

- [著書] ■『科挙と官僚制』(山川出版社、1997年)  
 ■『宋代政治結構研究』(中国・上海古籍出版社、2010年)  
 ■『宋代政治構造研究』(汲古書院、2012年)  
 ■『宋代社会的空間と交流』(中国・河南大学出版社、2008年、共編)  
 ■『文書・政令・信息溝通:以唐宋時期為主』(中国・北京大学出版社、2012年、共編)

の むら ちか よし  
野村親義 准教授

専門分野 近現代インド経済史

最終学歴 東京大学大学院農学・生命科 学位 博士（農学）  
学研究科

研究内容

私は、19世紀半ば以降大きく日本に後れを取ったものの、ここ20年急速に日本との差を縮めているインドの経済発展を規定する経済制度の有様を、世界各地に点在する一次史料と最新の経済理論を用いて研究しています。

最近の経済史研究は、証券取引所や職業訓練所のような歴史的に形成された経済制度の機能の有様が経済発展に大きな影響を及ぼすことを明らかにしています。さらに、これら経済制度の機能は地域や時代によって異なり、この差異が、地域や時代毎の経済発展の有様に大きな違いを生み出している、ということも明らかにしています。

主要業績

- [論文] ■ The origin of the controlling power of managing agents over modern business enterprises in colonial India, *The Indian Economic and Social History Review*, (vol. 51-1, 2014, Sage)
- TISCO's strikes in 1927-29: An initial step Towards a shopfloor democracy, *INDAS Working Papers*, (No. 11, 2013)
- Sources of industrial finance and volatility in stock exchanges in colonial India, *Paper presented at Asian Historical Economics Conference, Hitotsubashi Univ.*, (2012)
- Why was Indian steel not exported in the colonial period?—The influence of the British Standard Specification in limiting the potential export of Indian steel in the 1930s, *Modern Asian Studies*, (vol. 46-5, 2012, Cambridge University Press)
- Selling steel in the 1920s: TISCO in a period of transition, *The Indian Economic and Social History Review*, (vol. 48-1, 2012, Sage)

メッセージ・教育方針

強い問題意識、一級の一次史料、周到な既存の研究整理、そして熟考された分析視覚を携えて、これまで解明されていなかった歴史的事実を明らかにしたい、という意欲あふれる学生の皆さんをお待ちしています。

うえ の まさ ゆ き  
上野雅由樹 講師

専門分野 オスマン史

最終学歴 東京大学大学院総合文化研究科 学位 博士（学術）

研究内容

多様な文化的背景を持った人々が織りなすオスマン帝国の社会と政治を、キリスト教徒を取り巻く動向と彼ら自身の活動に注目し、トルコ語とアルメニア語の文書や新聞、イギリスの外交文書といった史料を用いて研究しています。これまでは、19世紀のアルメニア人の事例を中心に、宗派共同体と総主教座、「ミット制」議論、非ムスリムのオスマン官界参入といったテーマを扱ってきました。最近では、オスマン帝国をめぐる国際的な環境を視野に入れつつ、非ムスリムをめぐる制度的枠組みの展開の解明に取り組んでいます。

主要業績

- [論文] ■ 「19世紀オスマン帝国のアルメニア共同体における学校教育の普及過程」『日本中東学会年報』25-1、2009年。
- 「タンズィマート期アルメニア共同体運営組織の展開——ミット憲法成立過程の考察から」『東洋学報』91-2、2009年。
- 「ミット制研究とオスマン帝国下の非ムスリム共同体」『史学雑誌』119-11、2010年。
- 「非ムスリムのオスマン官界への参入——ハゴブ・グルジギアン(1806-65)の事例から」鈴木董編『オスマン帝国史の諸相』山川出版社、2012年。
- “‘For the Fatherland and the State’: Armenians Negotiate the Tanzimat Reforms,” *International Journal of Middle East Studies* vol. 45(1), 2013.

メッセージ・教育方針

歴史学の分野では、世界史的視野を持つことや、異文化間の関係性に対する関心が高まるなかで、西アジア地域はこれまで以上に重要性を帯びてきています。日本で暮らす多くの人にとって、この地域はあまり馴染みのない、理解することが比較的困難な文化圏かもしれませんが、それだけに多くの刺激をもたらしてくれると思います。

# 専修の特色

## 教室行事

東洋史学専修では、専修に所属する教員、大学院生全員が参加して行う研究発表会を随時開催し、各大学院生が年に2回程度、研究の進捗状況を報告する機会を設けています。例年2月には、日本史学および西洋史学専修と合同で、前期博士課程在学者の研究発表会を行っています。

また、やはり日本史学および西洋史学専修と合同で、6月には新歓ハイキング、11月には歴史学合同実習旅行を、3月には卒業・修了記念パーティーを行っています。

## その他の特色

東洋史学専修には、大学を卒業してそのまま進学した人だけでなく、社会人経験者が多く、研究分野の性格から留学生も多数在籍している点を特徴としています。また、教員はみな研究対象地

域など海外で研究・調査した経験が豊富です。多様な文化・経験を有する構成員がお互いに学びあうことができる、そんな環境が東洋史学専修の魅力の一つです。

## 博士論文・修士論文題目

### 博士論文

- ▶ 「明清搶糧搶米研究」
- ▶ 「道光期の清朝とジュブツンダンバ・ホトクトの政治関係に関する研究」
- ▶ 「漢晋期における人物伝の流行と社会」
- ▶ 「宋代士大夫の帰属意識に関する研究」
- ▶ 「唐宋変革期における地域社会と国家」
- ▶ 「中国五代国家論:天下のうちとそと」

### 修士論文

- ▶ 「宋代士大夫の家庭教育における女性について:江西士大夫の墓碑銘を中心に」
- ▶ 「明清時代の揚州における徽州商人の変遷:岑山渡程氏を中心として」
- ▶ 「唐代嶺南地域に関する一考察:交通路線を中心に」
- ▶ 「『華陽国志』編纂の意図とその背景」
- ▶ 「宋代における新たな女性像:侠女を手掛かりとして」
- ▶ 「明代運河と都市発展の関係:常州を例にして」
- ▶ 「明代における地方政府の財政構造:『山東経会録』を主要史料として」
- ▶ 「宋・元代の明州社会と市舶制度」
- ▶ 「唐代後半期における財政使職と権力者の関係性」
- ▶ 「花粉分析が語るインド仏教史:インド仏教はなぜインドで衰退したか」
- ▶ 「北宋初期官界ネットワークの一考察:『冊府元龜』の編纂官を手がかりに」



## 進路

## 前期博士課程修了

大学院博士課程進学(大阪市立大学、大阪外国語大学など)、  
一般企業、高等学校教員、国立国会図書館職員など。

## 後期博士課程修了 (単位取得退学者も含む)

大学研究者(名古屋市立大学、桃山学院大学、岡山大学、  
東京大学、北九州市立大学、阪南大学、佛教大学、神  
戸大学、台湾国立台北大学、中国赤峰学院など)、一般  
企業など。

## 在学生・修了生の声

在学生

早澤

茂さん

前期博士課程

現在私は、中学校の再任用教諭をしながら、教師という自らの経験を通して、戦前の教師が「なぜ、軍国主義教育に協力したのか」を研究しています。大阪市立大学へは、2001年に文学部第二部の日本史コースに入学し、これまで二度卒業しました。入学のきっかけは、「退職後の第二の人生」で何をしようかと考えたことから始まりました。フィリピンの日本人学校の事情を扱うことから、大学院では東洋史学専修に進学しました。以前から、歴史には多少興味を持っていたのですが、ずっと今まで歴史を学び続けることになるとは想像していませんでした。

働きながら二年間の修士課程を修了することは、きわめて困難なことだと思います。幸いにして、市大には長期履修制度があります。最大で四年間在籍することができ、学費も通常の二年間分を四年間で納めればよいのです。仕事と研究を両立させることは大変ですが、ぜひ入学されて若い学生諸君とともに学ぼうではありませんか！

在学生

横山

博俊さん

後期博士課程

本学の東洋史学専修は、現在、教員、大学院生、学部生合計20人ほどで構成されています。先生方は、中国史、インド史、オスマン史を専門とし、時代、地域ともに広範囲をカバーできる陣容となっています。私は中国史を専門としていますが、授業や演習の際の議論、他の学生との交流を通じて、自身の専門研究を深化させるだけでなく、専門と異なる分野の最新の研究に触れ、より多角的な視野を得るとともに分析の手法を学ぶこともできました。また、演習の際には、専門的な知識や議論の流れを専門外の人にもわかりやすく説明する技術がしばしば求められることもあり、プレゼンテーション能力の向上に役立ちました。一般企業への就職、あるいは研究者を志望する上でも、このような能力は大いに生かせると思います。

修了生

関西美術競賣株式会社

庄鳳娟さん

前期博士課程

私は中国史に興味があり、大阪市立大学大学院に進学しました。市大の図書館は膨大な書籍を収蔵しています。論文を書くために、よく地下書庫と七階の貴重資料を利用しました。研究室の先生たちもとても丁寧に指導してくれました。大学院で修士論文を書くことは大変な作業でしたが、中国史に関する専門的な知識を得るだけでなく、様々な問題を分析し、解決する力も伸びました。振り返ってみると、充実した日々を送ることができたと実感しています。

大学院では研究発表をする機会が多いです。そうした機会を通じて、聞き手にわかりやすいレジュメを作成し、自分の考えを伝えるスキルを身につけることができました。さらに、大学院では「自分で考え結論を出す」という考え方を学ぶこともできました。こうした考え方は、今の仕事でも常に持ち続けるべきだと感じています。

## 専修紹介

西洋史学専修は、文学研究科の改革により 2001 年度より新たに設けられました。文学研究科の中では歴史の浅い専修に属します。そのため当初は他専修に比してややこじんまりしていましたが、近年は院生も増え内部は活気にあふれています。2014 年 4 月現在、西洋史研究室には指導教員が 3 名、前期・後期博士課程の大学院生および OD が総勢 15 名近くいます。指導教員のうち、大黒俊二教授はイタリア中世史および環境史を、北村昌史教授はドイツ近現代史を、草生久嗣講師はビザンツ史を専攻しています。院生および OD の研究領域としては、教員と同じくイタリア中世史、ドイツ現代史、ビザンツ史を研究している者から、カタルーニャ中世史、アフリカ現代史、バルカン現代史、アメリカ独立革命史、ポスト・ビザンティン美術史まで多彩です。西洋史学専修の院生室は、おそらく文学研究科の中でもっとも多くの言葉が飛び交い、世界各地の多様な文化が出会う場といえるでしょう。

### 教育方針

西洋史学専修では、西欧・東欧・地中海地域からアメリカ合衆国にわたる諸社会の特質を、歴史的分析の手法を用いて学ぶとともに、自ら研究する能力を身につけることをめざします。西欧近代諸語の講読を通じて研究文献や史料の読解能力を養うとともに、古代・中世史の場合はギリシア語・ラテン語史料の読解力の養成に努めます。本専修では教員の専攻・図書ともに、ビザンツ史、イタリア史など、他大学ではあまり類のない分野が充実しているのが大きな特徴といえます。しかしもちろん、これ以外の伝統的な西洋史諸分野での研究・教育にも力を入れています。

前期博士課程修了後は、多くの人が本研究科の後期博士課程に進学します。後期博士課程進学後は、海外の大学へ留学する人が少なくありません。これまでロシア、オーストリア、イタリア、イギリス、ドイツなどに留学しています。

前期博士課程のカリキュラムは大きく時代順に構成されています。講義は古代史、中世史、近・現代史について広く学べるよう組んであります。演習では西欧諸国語による研究書講読や、ギリシア語・ラテン語の史料講読を通じて、テキストを正確に読解する力をつけます。さらに研究指導を通じて修士論文の作成をしっかり指導します。さらに教員と大学院生によるラテン語・ギリシア語・ドイツ語の読書会が開かれ、修士論文の作成前には前期博士課程 2 年の院生だけの自主ゼミなども行われています。後期博士課程では、教員の個人指導の下に論文執筆や学会発表を行い、課程博士論文を完成することをめざします。後期博士課程の院生は、すでに多くの学会で発表し、学術雑誌に論文を掲載しています。西洋史学専修はこれまでに 2 名の課程博士と 2 名の論文博士を送り出しています。

所属教員 .....

**大黒 俊二**

(イタリア中世史、リテラシー研究、環境史)

**北村 昌史**

(近現代ドイツ社会史、ブルーノ・タウト研究、日本・ヨーロッパ交流史)

**草生 久嗣**

(ビザンツ史、宗教社会論、異端学)

おお ぐろ しゅん じ  
大黒俊二 教授

専門分野 イタリア中世史

最終学歴 大阪大学大学院文学研究科

学位 博士（文学）

研究内容

中世・ルネサンス期のイタリアを中心に、ことばと社会の関係をさまざまな面から探っています。人がことばを使って生きていくのは普遍的な現象ですが、この行為には、言語学や文学研究でいまだ十分開拓されていない広大な研究領野があることに、50代も半ばを過ぎて気づきました。またこの領野を探る上で、中世・ルネサンスのイタリアが恰好の場であることにも気づきました。それ以後、当時の史料をもとに説教、噂、俗語、書体、悪文、悪筆から歴史を読み取ろうとしています。このような研究を歴史学と認めてもらえるだろうか、と不安に思いながらその面白さに憑りつかれているところです。

主要業績

- [著書] ■『嘘と貪欲—西欧中世の商業・商人観—』(名古屋大学出版会、2006年)  
 ■『声と文字』(岩波書店、2010年)  
 [論文] ■『俗人が俗語で書く—限界リテラシーのルネサンス—』『こころ』(5号、2012年)  
 ■『イタリア・ルネサンスにおける「俗語化」—翻訳とリテラシー—』『ことばと社会』(14号、2012年)  
 ■"From Ears to Hand, from Hand to Heart: Writing and Internalizing Preaching in Fifteenth-Century Florence," in M. G. Muzzarelli (ed.), *From Words to Deeds. The Effectiveness of Preaching in the late Middle Ages* (2014, Brepols)

メッセージ・教育方針

細部を大切にすること、堅固な細部から全体を見通すこと、ミクロコスモスの中にマクロコスモスを見出すことを重視しています。歴史の研究は細かな事実の探求ですが、なぜそのような細かな事実にこだわるのか、それは細部から全体が見えてきたときはじめて実感できるものです。院生諸君には講読や演習を通じてこのことを実感してもらえるよう指導しています。

きた むら まさ ふみ  
北村昌史 教授

専門分野 近現代ドイツ社会史

最終学歴 京都大学大学院文学研究科

学位 博士（文学）

研究内容

19世紀ベルリンの都市社会史研究を出発点として、現在は、ナチス政権成立とともに日本に亡命してきたブルーノ・タウトがベルリンで設計したジードルング（住宅地）を題材に、ヴァイマル期ドイツの社会史に取り組んでいます。この時期、欧米諸国では機能性・合理性を追求した「モダニズム建築」による住宅建設が積極的に進められ、新しい生活様式もたらされます。こうした新しい生活文化の出現を実証的にたどりつつ、タウトの日本文化論や日本における「モダニズム建築」の導入の研究を通じてヨーロッパと日本の交流史にも取り組んでいます。

主要業績

- [著書] ■『ドイツ住宅改革運動—19世紀の都市化と市民社会』(京都大学学術出版会、2007年)  
 [論文] ■『互酬性から見た近代ドイツ社会—結社と社会国家』『パブリック・ヒストリー』(第9号、2012年)  
 ■『ブルーノ・タウトとベルリンの住環境—1920年代後半のジードルング建設を中心に』『史林』(92巻1号、2009年)  
 ■北村昌史・米岡大輔「将来の大学教師としてのスキル向上を目指して—大阪市立大学文学研究科の「大学教育実習制度」(2011年度導入)における挑戦』『大学教育(大阪市立大学)』(第10巻第1号、2012年)

メッセージ・教育方針

歴史研究というのは、過去の特定の時代・地域で起こったことをきちんと把握し、それを現代のわれわれにも理解できるように説明することです。そのために史料を正確に読み解き、先行研究をきちんと読んで自分の意見を明確にする能力を身に付けていただくことが、私の教育方針の基本といえます。

くさ ぶ ひさ つぐ  
草生久嗣 准教授

専門分野 **ビザンツ帝国史、古代地中海史**

最終学歴 シカゴ大学大学院社会科学部 学位 Ph.D.(History)  
歴史学科

### 研究内容

中世ヨーロッパと地中海、とくにビザンツ帝国（ローマ帝国中世東方領）の政治宗教問題を専攻しながら、中世における「異端視」の構造を明らかにする研究（「異端学」）に取り組んでいます。有名な異端審問や魔女狩りといった出来事は、なぜかビザンツ世界においては見られませんでした。そのビザンツの舞台、アフリカ、中東やスラヴ世界とも交錯した東地中海世界（オイクメネー）の本質を問うことをマクロなテーマとし、一方でその認識が記録された諸文献史料（Heresiology）の解析をミクロなテーマと位置づけています。

### メッセージ・教育方針

文明の十字路にあったビザンツ帝国を専門とするため、多くの時代・地域・言語・学問分野との交流を大事にしています。ビザンツ学専攻希望者にはもちろんのこと、世界史やヨーロッパ文化、キリスト教やイスラームに惹かれた初学者にも、国際性・知的最先端を見すえて計画された大学院プログラムを提供します。

### 主要業績

- [論文] ■「ビザンツ帝国における宗教的《境界》の生成——正教会異端論駁書を題材に」、『歴史学研究』(833号、2007年)  
 ■「越境する知をささえるもの—ビザンツの情報集積」『中央評論』(第266号、2010年)  
 ■「ビザンツの「神秘主義」と「異端」——コンスタンティノス・クリュソマルロスの事例(1140)を題材に」『エクフラシス—ヨーロッパ文化研究』(第2号、2012)  
 ■ *Comnenian Orthodoxy and Byzantine Heresiology in the Twelfth Century: A Study of the Panoplia Dogmatica of Euthymios Zigabenos*, Ph.d. Dissertation, University of Chicago, 2013.

# 専修の特色

## 教室行事

研究に関しては大学院前期博士課程、後期博士課程、およびODによる研究発表会を年に数回程度開催しています。また、前期博士課程については日本史学専修および東洋史学専修と3専修の合同で研究発表会をおこなっており、そこには後期博士課程の

大学院生も参加しています。教室旅行やハイキングなどもこの3専修合同で行うなど、歴史学として密接な関係を保ちながら運営されています。

## その他の特色

各教員の研究分野に応じてイタリア史、ドイツ史、ビザンツ史関係の学会と深い関わりがありますが、専修としてまとまって取

り組んでいる学会活動は今のところありません。しかし将来、独自の学会や雑誌を立ち上げるのが西洋史学専修の夢です。

## 博士論文・修士論文題目

### 博士論文

- ▶ 「15世紀イタリアにおける都市社会と遍歴説教 ——フランチェスコ会厳修派説教師を中心に」
- ▶ 「中世後期イタリアにおけるコムーネと司法 ——14世紀ルッカの事例より——」
- ▶ 「ハプスブルク帝国領ボスニア・ヘルツェゴヴィナにおけるムスリム知識人の「民族」形成」
- ▶ 「東方正教会における死後の世界とその表象 ——『新バシレイオス伝』及び〈最後の審判〉にみる私審判」

### 修士論文

- ▶ 「中世イタリアの飢饉と農村 ——14世紀のフィレンツェ領域を中心に——」
- ▶ 「古代末期アレクサンドリアの諸勢力に関する一考察 ——宗教的対立を中心に——」
- ▶ 「第二帝政期ドイツ艦隊建設における海軍とクルップ社の関係 ——1897~1914年における装甲板価格設定交渉の問題から」
- ▶ 「末期ビザンツ帝国の外交使節 ——テオドロス・メトキテスの事例から——」
- ▶ 「タンズイマート改革における理念と地方社会 ——中央集権化と宗派間平等を例に——」
- ▶ 「6~7世紀ローマ帝国のドナウ川国境地域とキリスト教組織」
- ▶ 「13世紀ルチエーラのムスリム共同体と地域権力」

# 進路

## 前期博士課程修了

一般企業、官公庁（奈良県庁、郵便局、税関、入国管理局）、教員、大学院博士課程（大阪市立大学）、大学職員（京都教育大学）など。

## 後期博士課程修了（単位取得退学者も含む）

大学研究者（信州大学）、研究員（日本学術振興会、大阪市立大学都市文化研究センター）など。

# 在学生・修了生の声

在学生

立花

健さん

前期博士課程

ナチスの戦争政策に反対してピラを配布したミュンヘンの学生グループ『白バラ』を研究しています。現在のドイツがポーランドやフランスなどの近隣諸国と良好な関係を築くことができたのは自らの侵略戦争をきちんと反省できたからであるように思います。このグループの小さな運動はそのような反省の原点です。その意味で彼らは『愛国者』であったと言えます。今は、この若者たちに精神的な影響を与えたとされるテアドール・ヘッカーの『昼と夜の日記』を、指導教授と博士コースの院生の協力のもとに、週に一度のゼミ形式で読み進めています。300ページの独文もあと二ヶ月ほどで読了します。これを修士論文『テアドール・ヘッカーのナチズム批判』にまとめようと思います。貴重な研究時間を割いて協力して頂いた諸氏に感謝しています。

修了生

大阪市立大学都市文化研究センター研究員

木村

容子さん

後期博士課程

博士課程では西洋史研究者としての基礎を身に付けることができた。とりわけ記憶に残っているのは大黒俊二先生によるラテン語史料の読書会である。一般信徒に対する年一回の告解を義務付けた第四回ラテラノ公会議（1215年）の教令集から、コンスタンティヌス帝の寄進状が捏造文書であることを文献学の力で論証した15世紀の人文主義者ロレンツォ・ヴァッラの著作まで、その後の西欧社会に多大なインパクトを与えた作品について背景を理解しながら丁寧に読み進めてゆくなかで、史料を読む楽しさと対象に真摯に向き合う姿勢を学んだ。では史料から得たものをいかに論文へとつなげるのか、博士論文の執筆ではその難しさも実感し、きめ細かい論文指導に幾度も支えられた。今後も博士課程で教わったことを活かして、中世イタリア史の研究を続けていきたい。